

|    |                     |              |          |
|----|---------------------|--------------|----------|
| 所属 | 心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程 | 修了年度         | 平成 27 年度 |
| 氏名 | 戸金 朋美               | 指導教員<br>(主査) | 笹川 智子    |

|      |  |
|------|--|
| 論文題目 | <b>関係妄想的認知の加害的な側面の検討</b><br><b>—情報収集スタイルと反すう・他者配慮傾向との関連—</b> |
|------|--|

|  |
|--|
| 本文概要   |
| <p><b>【問題と目的】</b> 関係妄想とは、あるしぐさや言葉、身のまわりのちょっとしたことなどが自分に向けられているという信念である(APA, 2013)。関係妄想には被害的な側面と、加害的な側面が存在し、両者を合わせて「関係妄想的認知」と呼ぶ。津田(2011)は、情報収集スタイルが反すうを媒介要因として関係妄想的認知を生じるモデルを提案しているが、このモデルでは関係妄想的認知の被害的な側面しか扱われていない。加害的な関係妄想的認知は、相手に迷惑をかけたくないという心性が働くことから、被害的な関係妄想的認知とは異なるメカニズムによって生起する可能性がある。そこで本研究では、関係妄想的認知の加害的な側面を測定する尺度を作成し、津田(2011)のモデルを参考に、関係妄想的認知の両側面と情報収集スタイル、反すう、他者配慮、対人恐怖症との関連について明らかにする。</p> <p><b>【研究方法】</b> 研究 1 では、加害的な関係妄想的認知を測定する尺度を作成した。研究 2 では、関係妄想的認知と情報収集モデルの検討を行った。<b>調査対象者と質問紙の構成</b>研究 1 大学生 304 名。①フェイスシート②自己関係づけ尺度(金子,2000)③加害的な自己関係づけ尺度(独自に作成)④対人恐怖心性尺度(堀井・小川,1996)⑤罪悪感喚起状況尺度(有光,2002)⑥自己意識尺度(辻,1993)研究 2 大学生 301 名。①フェイスシート②自己関係づけ尺度(金子,2000)③加害的な自己関係づけ尺度④不確実な対人場面における情報収集スタイル尺度(津田,2011)⑤不確実な対人場面における他者の本心についての反すう尺度(津田,2011)⑥行動基準尺度(菅原他,2006)⑦Taijin Kyofusho Scale 日本語版(Kleinknecht et al., 1997)。</p> <p><b>倫理事項</b> 口頭および文面にて調査概要と倫理事項について説明し、回答をもって承諾を得たものとした。</p> <p><b>【結果】</b> 情報収集スタイルが関係妄想的認知の被害、加害の両側面に影響を与え、対人恐怖症状をもたらすというモデルを作成し、パス解析を行った。その結果、情報収集スタイルの当事者の観察とメディアの活用は、被害的な自己関係づけ(観察; <math>\beta=.17</math>,メディア; <math>\beta=.16</math>)と、加害的な自己関係づけ(観察 <math>\beta=.22</math>,メディア; <math>\beta=.31</math>)のいずれも高めていた。しかし、その影響は加害的な自己関係づけに対しての方が強く、加害的な自己関係づけは、対人恐怖症状に強い影響を与えていた(<math>\beta=.60</math>)。反すうの切り替え得点の高低と他者配慮得点の高低、各情報収集スタイル得点の高低を要因、被害的な自己関係づけ、加害的な自己関係づけ、対人恐怖症得点を特性値とした分散分析を行った結果、被害的な自己関係づけと加害的な自己関係づけに対して、反すうの切り替えと当事者の観察の交互作用が有意であった(被害:<math>F(1, 120)=6.37, p&lt;.05</math>, 加害:<math>F(1, 119)=4.36, p&lt;.05</math>)。さらに、対人恐怖症得点に対して、他者配慮傾向と当事者の観察の交互作用が有意であった(<math>F(1, 95)=6.33, p&lt;.05</math>)。</p> <p><b>【考察】</b> パス解析の結果から、社会的スキルが低い人は当事者とのコミュニケーションや他の人からの意見といった直接的なコミュニケーションを避けるために、当事者の観察やメディアの活用といった間接的な情報収集スタイルに依存せざるを得ず、結果として関係妄想的認知が高まっていることが推察された。また、相関分析と分散分析の結果から、当事者の観察自体は一般に反すうの切り替えを容易にするが、反すうの切り替えが苦手な人が当事者を観察することは新たな反すうの材料を増やすことにつながり、当事者の観察を行わなかった場合と比べて関係妄想的認知が強まることが示された。</p> <p><b>【主要な参考文献】</b> 津田恭充(2011).不確実な対人場面における情報収集スタイルと関係妄想的認知—反すうを媒介としたメカニズム— カウンセリング研究, 44, 101-109.</p> |